

## 家庭科における被服構成学実習の役割について

### A Reflection on the Role of Clothing Practice in Homemaking

福村 愛美

Manami Fukumura

#### ABSTRACT

The purpose of this study is to investigate what consciousness senior high school students and college students have for coeducational homemaking, clothing practice and general homemaking. The results were as follows.

1. Senior high school students and college students are very interested in cooking practice of homemaking. Senior high school students are not interested in living life plan. College students are not interested in home life plan.
2. Senior high school students make use of works of clothing practice better than college students.
3. Both senior high school students and college students almost recognize coeducational homemaking to be valuable. In addition to this, college students want male high school students to study homemaking.
4. The students who are not interested in the field of clothing life think that clothing practice is difficult in homemaking.

#### 1. 諸 言

高校家庭科が男女共修になることによって、被服構成学実習がどのように扱われるかは、各高校で教育内容、教育方法において学校差がかなり生じると考えられる。被服構成学実習をこれからは男子生徒にも学習させるということで、男子生徒が被服構成学実習にどのような興味を示すかは実際に行ってみなければわからない事である。また教師にとっても新たな苦勞が出てくると考えられる。家庭科が男女共修になるにあたって、被服構成学実習の問題点を明らかにするために、実際に家庭科を学習している高校生と、すでに家庭科を学習した短大生が、被服学分野及び被服構成学実習に対してどのような意識を持っているか、家庭科男女共修についてどのように考えているかを調査し、高校生と短大生の意識の違いを明らかにし、家庭科における被服構成学実習の役割を考察した。

#### 2. 方 法

調査は1993年2月に、大分県立芸術文化短期大学に在学する満18才から21才までの女子学生

125名と、附属緑丘高等学校に在学する満15才から満17才までの高校生160名の合わせて285名を対象に行った。調査方法は授業中に調査表を配布し、その場で質問事項について記入してもらい回収した。有効回収数は268票で、回収率は94.0%である。調査項目は、高校の家庭一般について（7項目）、被服構成学実習について（14項目）、高校家庭科の男女共修について（2項目）である。

分析方法は、調査データを項目別に高校生と短大生を各々単純集計し、意識の違いを明らかにした。さらにクロス集計で、家庭科の授業の中での被服学分野の捉え方、被服構成学実習の役割り、家庭科男女共修の意味など、相互の関連性を $\chi^2$ 値及び $\sqrt{Cr}$ 値をもとに明らかにした。

### 3. 結果および考察

#### (1) 単純集計結果

図1の①の家庭科の授業で興味がある分野については、高校生と短大生の差はあまりなく、どちらも調理実習に興味があると答えた人が、50%前後占めた。逆に②の興味がない分野としては、どちらもばらつきが見られたが、高校生の方が、特に住生活の設計を29.4%の人が興味がないと答え、短大生の方は、家庭生活の設計を28.2%の人が興味がないと答えた。共通点としては実習の様な形となって現れるものでなく、設計という計画段階に興味がないと考えている。図2の家庭科で難しいと思う分野では、短大生の方が高校生よりも、より被服製作や、母性の健康・乳幼児の保育を難しいと考えている。図3の①の家庭科で実際に役立つ分野では、高校生と短大生との差はあまり見られないが、②の家庭科で実際に役立たない分野では、短大生の方は家庭生活の設計を高校生よりも12.2%多く挙げていて、高校生は被服製作を短大生よりも7.6%多く挙げていて、短大生が家庭生活の設計を役立たないと考えるのは、家庭生活はわざわざ設計しなくても、普段行っているのだから必要ないと考えている。

図4の被服構成学実習で制作した作品を活用したかどうかでは、高校生の方がよく活用したと答えていて、高校生は被服製作をして、すぐに活用していると考えられる。図5の被

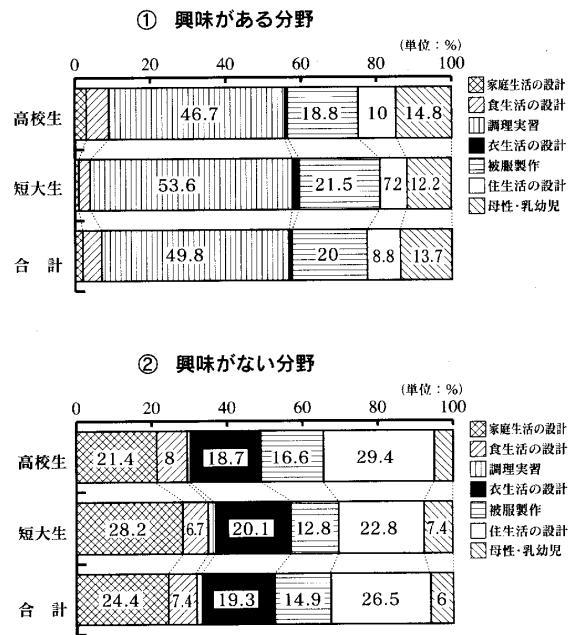


図1. 家庭科の授業で興味がある分野  
興味がない分野

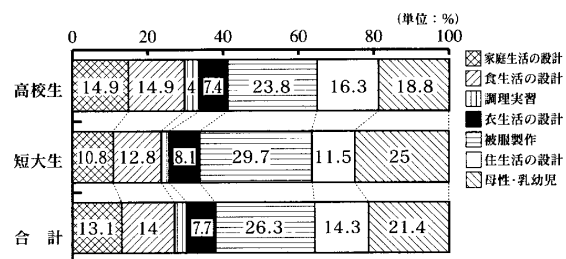


図2. 家庭科で難しいと思う分野

## 家庭科における被服構成学実習の役割について

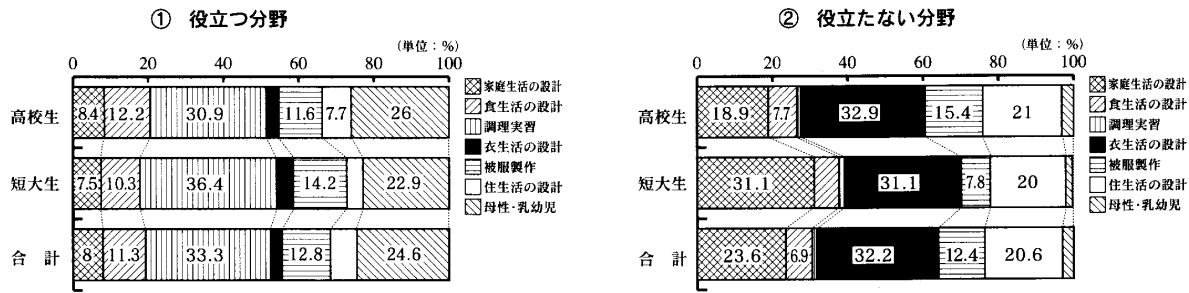


図 3. 家庭科で実際に役立つ分野、役立たない分野

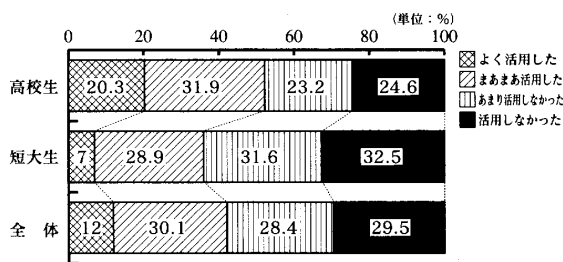


図 4. 被服構成家実習で制作した作品の活用度

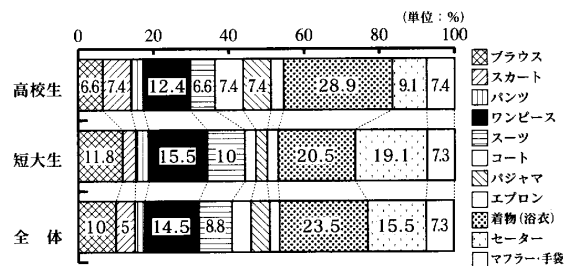


図 5. 被服構成実習で制作したもの

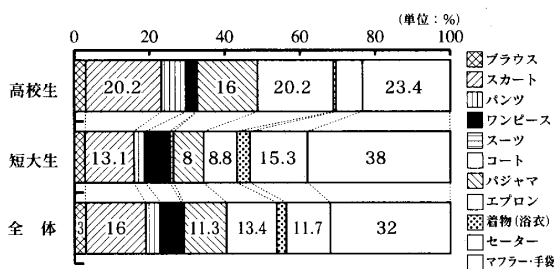


図 6. 家庭科の授業以外で自分で制作した作品

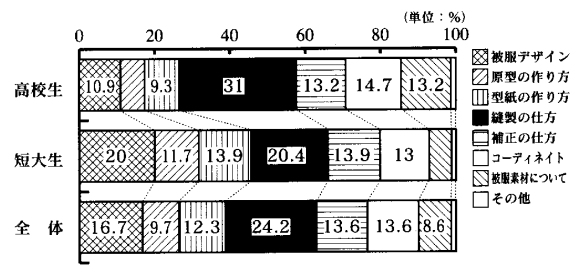


図 7. 被服構成学実習で重点的に学びたい内容

服構成学実習で制作したいものとして、高校生は着物（浴衣）を28.9%の人が、制作したいと答えている。これは新しい色、柄の浴衣が最近若者の間で流行していて、制作して着てみたいと思っていると考えられる。短大生はセーターを作りたいという学生が高校生よりも多く、短大生の方が時間的にゆとりが出来て、セーターなどを編んでみたいと考えている。図6の家庭科の授業以外で自分で制作した作品としては、短大生がマフラー・手袋が38%と高校生よりはるかに多い。これは大学生になってから、作った人が多いのではないと思われる。このように家庭科の授業を離れても、制作意欲があると考えられる。図7の被服構成学実習で重点的に学びたい内容としては、高校生は、縫製の仕方を31%と特に多く挙げている。短大生は、被服デザインの仕方とか、縫製の仕方が比較的多く、全体的に偏りが少ない。

図8の①の高校家庭科で男女共修に価値があるかと、②の男子も家庭科を学ぶべきかでは、高校生と短大生で違いが顕著に出た。①も②も、高校生よりも短大生の方が、男子も家庭科を学ぶべきであると考えている。これは共学である高校生よりも、女子が大半を占める短大生の方が、家庭科男女共修の価値があると考えていると思われる。そして年齢的にも大学受験で忙

しい高校生よりも、生活を見直す時間のある短大生の方が、より真剣に男子の家庭科の学習の必要性を感じていると考えられる。

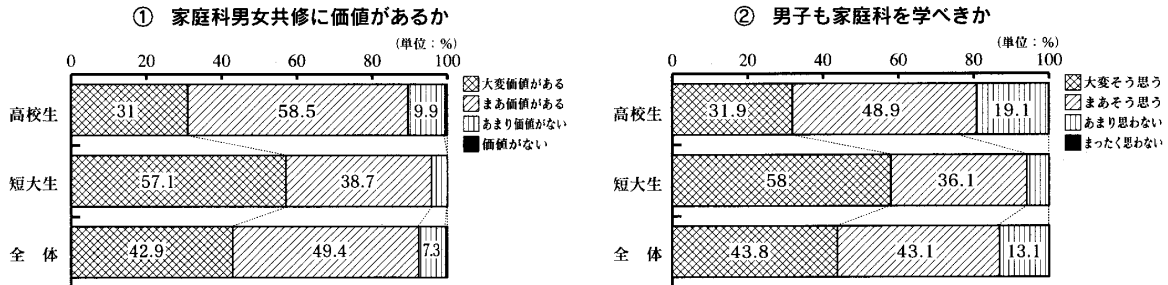


図8. 家庭科の男女共修について

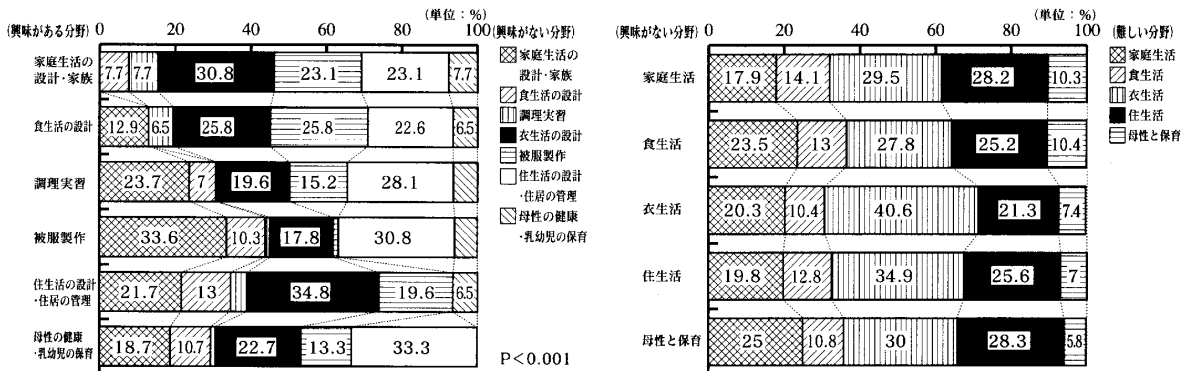


図9. 家庭科で興味のある分野と興味がない分野とのクロス集計結果

図10. 家庭科で興味がない分野と難しい分野とのクロス集計結果

(2) クロス集計結果

図9は家庭科の授業で興味がある分野と、興味がない分野とのクロス集計結果を示したものであるが、被服製作に興味がある人は、家庭生活の設計・家族(33.6%)と住生活の設計・住居の管理(30.8%)に興味がないと答えている。被服製作に興味がある人は、すぐ形となって成果が現れる事に興味があるということなので、家庭生活の設計や住生活の設計などあまり目に見えて成果が出ない事には興味がないと考えられる。図10の家庭科の授業で興味がない分野と、家庭科で難しいと思う分野とのクロス集計では、衣生活に興味がない人は、40.6%と圧倒的に多く衣生活を難しいと答えている。これは興味がないから難しく思えるとも、難しいから興味がないとも考えられる。

図11の①の家庭科の授業で興味のある分野と、被服構成学実習で難しいと思う内容は何かとのクロス集計結果では、衣生活に興味があると答えた人は、他の分野に興味があると答えた人よりも、型紙の作り方と原型の作り方が難しいと答えている。型紙の作り方が難しいという傾向は全体的に共通しているが、衣生活分野に興味がある人はより強く難しいと考えている。②の家庭科の授業で興味のある分野と、被服構成学実習で重点的に学びたい内容は何かとのクロス集計結果では、衣生活に興味がある人は被服構成学実習で学びたい事について、他の分野に興味がある人より偏りが少なく、全体的に満遍なく学びたいと答えている。衣生活に興味のあ

## 家庭科における被服構成学実習の役割について

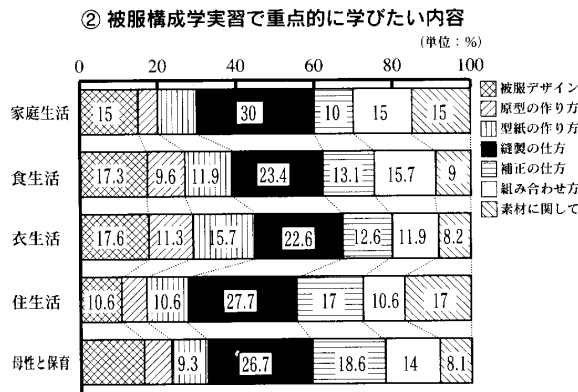
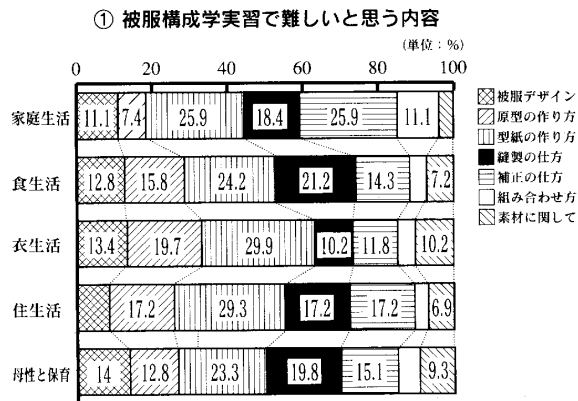


図11. 家庭科で興味のある分野と被服構成学実習とのクロス集計結果

る人は、被服構成学実習の色々な内容に興味があると考えられる。図12の家庭科で興味がない分野と被服構成学実習で興味がある内容とのクロス集計結果では、衣生活に興味がない人は衣服の組合せの仕方に、他の分野に興味がないと答えた人より興味があると一番多く答えている。これは衣生活に興味がない人は、衣服を製作する事よりも衣服のコーディネートの方など、出来上がった衣服を感覚的にとらえる方に関心がある。図13は、家庭科で興味がない分野と、被服構成学実習で製作したくないと思うものの理由とのクロス集計結果を示したものであるが、理由として難しいからと考えている人は、住生活の設計・住居の管理 (31.5%) に興味がないと答えている人が多い。また利用できないからと思っている人は、家庭生活の設計・家族 (31.6%) に興味がないと答えている。

図14は家庭科で難しいと思う分野と、被服構成学実習で難しいと思う内容とのクロス集計結果である。衣生活分野が難しいと思う人は、他の分野を難しいと答えた人よりも多くの人が縫製の仕方を難しいと答えている。衣生活が難しいと考えている人は、縫製のような技術的なこ

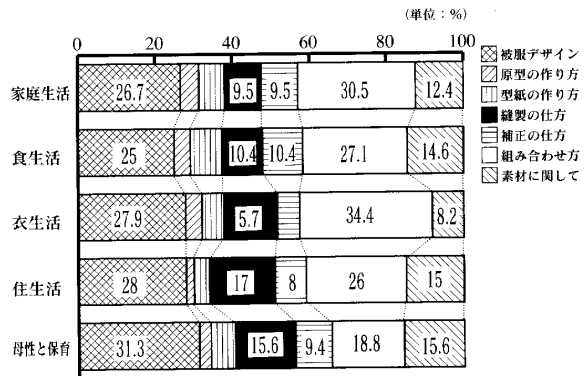


図12. 家庭科で興味がない分野と被服構成学実習で興味がある内容とのクロス集計結果

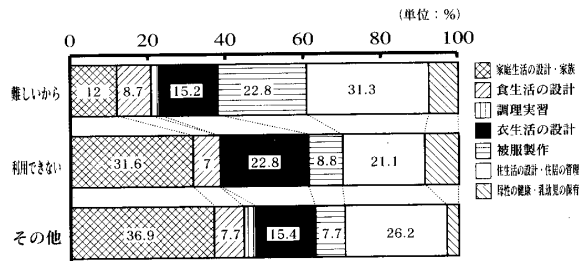


図13. 被服構成学実習で製作したくないものの理由と家庭科で興味がない分野とのクロス集計結果

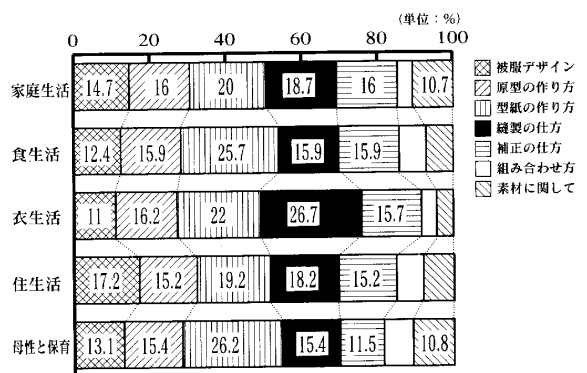


図14. 家庭科で難しい分野と被服構成学実習で難しい内容とのクロス集計結果

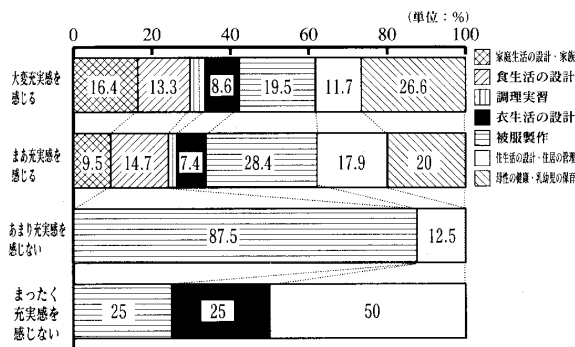


図15. 被服製作で完成した時の充実度と家庭科で難しいと思う分野とのクロス集計結果

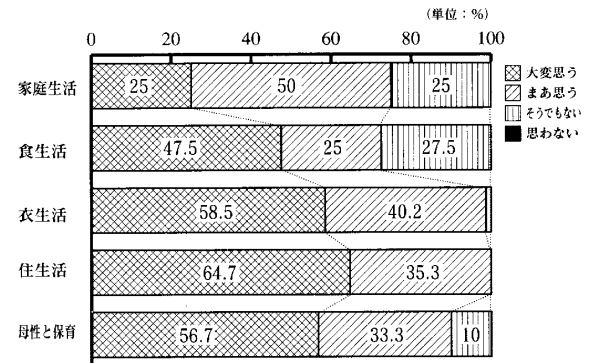


図16. 家庭科で実際に役立つ分野と被服製作で完成時の充実度とのクロス集計結果

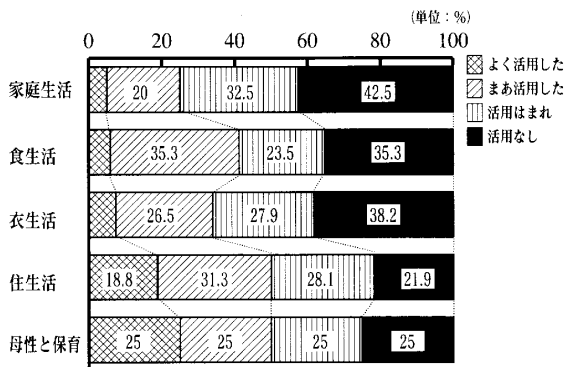


図17. 家庭科で役立つ分野と被服製作の作品の活用度とのクロス集計結果

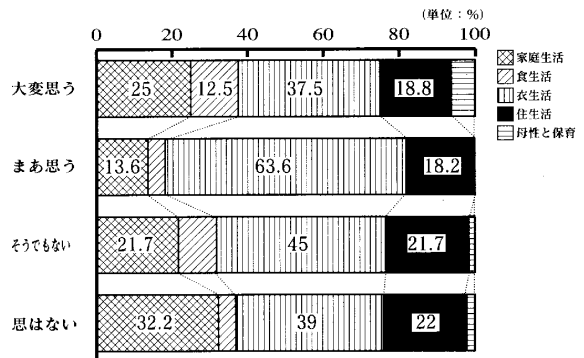


図18. 被服構成学実習が時代遅れであるかと家庭科で役立つ分野とのクロス集計結果

とが苦手であると考えられる。図15は被服製作を完成した時に充実感を感じるかと家庭科で難しいと思う分野とのクロス集計結果を示したものであるが、あまり充実感を感じないと答えた人は、圧倒的に被服製作（87.5%）を難しいと考えている。難しいと思っているから被服製作があまり面白くなく感じ、完成してもあまり満足に行く作品ができず、充実感が感じられないのではないと思う。図16は家庭科の授業で実際に役立つと思う分野と被服製作で完成した時の充実感とのクロス集計結果であるが、衣生活や住生活が役立つと答えた人は、ほとんどすべての人が充実感を感じている。図17は家庭科の授業で役立つ分野と、被服製作の作品の活用度とのクロス集計結果であるが、家庭生活と衣生活を役立つと答えた人が活用度が低い。衣生活が役立つと答えた人は、被服製作を活用しないから役立つと考えるのではないと思う。図18の家庭科の授業で役立つ分野と、被服構成学実習が時代遅れであるかどうかとのクロス集計結果では、時代遅れであるともあ思う人は、圧倒的に衣生活（63.6%）が実際に役立つと答えている。やはり被服構成学実習を時代遅れであると思っているのだから、衣生活が役立つと考えるのは当然であるのかもしれない。

図19は日常生活で行っている事柄なので家庭科で学ぶ必要がないと思う分野と、授業以外で被服製作した場合何を参考にしたかとのクロス集計結果であるが、衣生活を学ぶ必要がないと答えた人は、本を参考にしたが45.5%と多く、教科書を参考にした者はほとんどいなかった。

家庭科における被服構成学実習の役割について

これは衣生活を学ぶ必要がないと考えていることを顕著に表わしている。しかし教科書以外の本を参考に、被服製作をする意欲があることを示していて、家庭科をわざわざ学ぶ必要がないと考えているかもしれないが、家庭科の授業で学んだことが基礎となって身につけていることに、気が付いていないのではないかと思う。図20は日常生活で行っている事柄なので家庭科で学ぶ必要がないと思う分野と被服構成学実習が時代遅れであるかどうかとのクロス集計結果であるが、時代遅れであるとやや思っている人も衣生活を学ぶ必要がないと考えている人は8%と少なく、時代遅れであると思っている人も必ずしも学ぶ必要がないとは考えていない。図21は家庭科で男子にも学んで欲しいと思う分野と、被服構成学実習が時代遅れであるかどうかとのクロス集計結果であるが、衣生活を男子にも学んで欲しいと考えていても、時代遅れであると思っている比率は、他の分野を学んでほしいと考えている人より多い。これは矛盾しているように思えるが、図20の時代遅れであると思っただけでも学ぶ必要はないとは考えていないという結果と同じことがいえる。この事から時代遅れである事と、学ぶ必要の有無とは直接には関連性がないと考えられる。図22は家庭科で実際に役立つと思う分野と家庭科を男子も学ぶべきであるかと思うかとのクロス集計結果であるが、男子も学ぶべきであると考えない人が、食生活や母性と保育などの分野が役立つと、より強く考えている。男子も学ぶべきだと考えている人が、役立つ分野の偏りが比較的少ない傾向にある。これは男子も学ぶべきだと考えている人が、各々の分野の必要性を理解しているのではないかと考えられる。

図23は家庭科の被服構成学実習で何を製作したかと、何を製作したいと思うかとのクロス集計結果を示したものであるが、何を製作していても製作したもの以外のものを作った

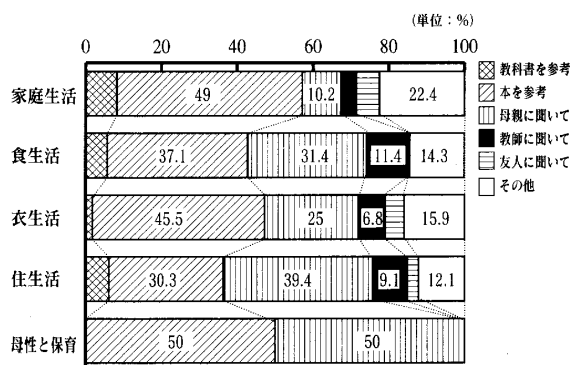


図19. 家庭科で学ぶ必要がない分野と授業以外で被服製作した場合何を参考にしたかとのクロス集計結果

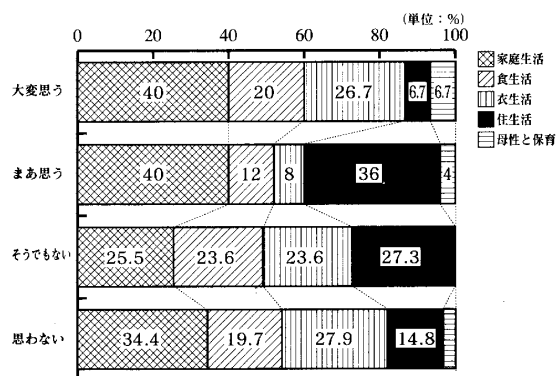


図20. 被服構成学実習が時代遅れであるか家庭科で学ぶ必要がない分野とのクロス集計結果

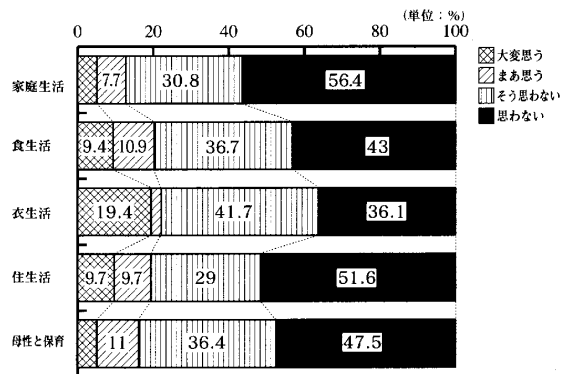


図21. 家庭科で男子にも学んでほしい分野と被服構成学実習が時代遅れであるかとのクロス集計結果

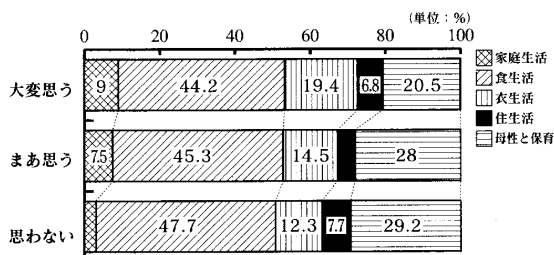


図22. 家庭科を男子も学ぶべきであるか家庭科で役立つと思う分野とのクロス集計結果

いと答えている。スカートを作成した人は、ワンピース、セーター、着物(浴衣)を作成したいと考えている人が多い。マフラー、手袋を作成した人は、着物(浴衣)を多くの人が作成したいと思っている。エプロンを作成した人は、スーツ、ブラウス、セーター、着物(浴衣)、ワンピースなど作成したいものが分かれた。図24は被服構成学実習で製作したくないと思うものと、その理由とのクロス集計結果を示したものであるが、製作したくないものとしてスーツやコートが多く、難しいからという理由が多い。実際にスーツやコートを製作するのは難しいので、あまり大変な製作はしたくないと考えられている。次にブラウスが製作したくないものとして多いのであるが、ブラウスは利用できないからという理由が多い。これは製作するタイプのデザインが流行と合っていないなどの理由で、着用したくないからではないかと考える。着物(浴衣)は製作したくないものとしてあまり多くはないが、理由は難しいからと答えている人が大変多い。図25は被服構成学実習で興味がある内容と重点的に学びたい内容とのクロス集計結果を示したものであるが、興味がある内容として多かったのは、被服デザインの仕方とコーディネイトの仕方である。どちらも重点的に学びたい内容は、縫製の仕方を一番多くあげているが、被服デザインの仕方に興味がある人は、次に被服デザインの仕方を重点的に学びたいと答えていて、コーディネイトの仕方に興味のある人もやはり次に、コーディネイトの仕方を重点的に学びたいと答えている。これは興味のある内容を、特に学びたいと思っている事を反映していると考え

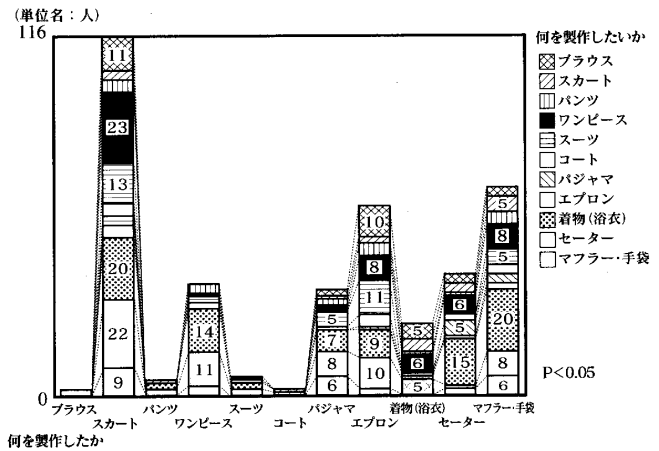


図23. 被服構成学実習で何を製作したかと何を製作したいかとのクロス集計結果

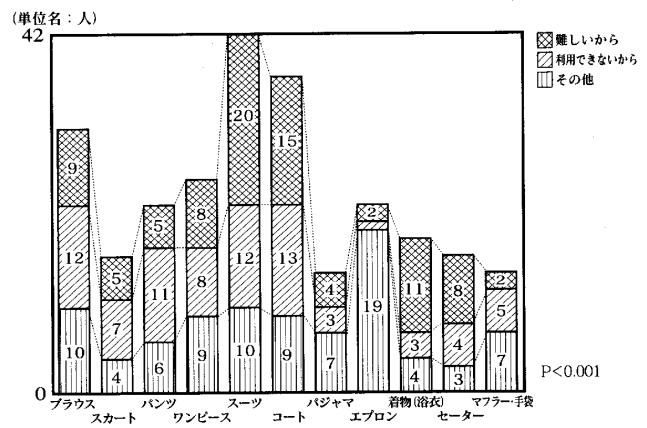


図24. 被服構成学実習で製作したくないものとその理由とのクロス集計結果

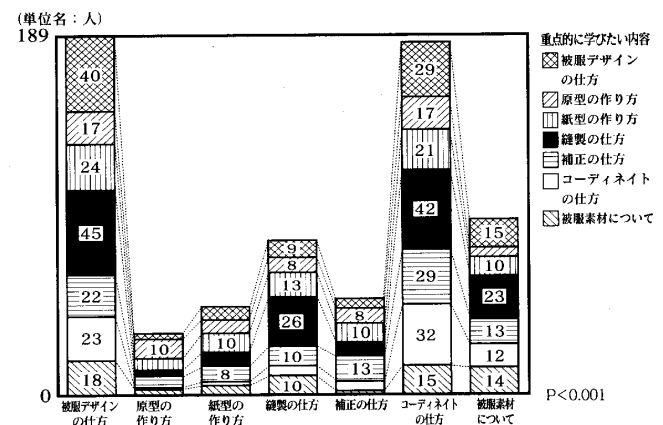


図25. 被服構成学実習で興味がある内容と重点的に学びたい内容とのクロス集計結果



## 家庭科における被服構成学実習の役割について

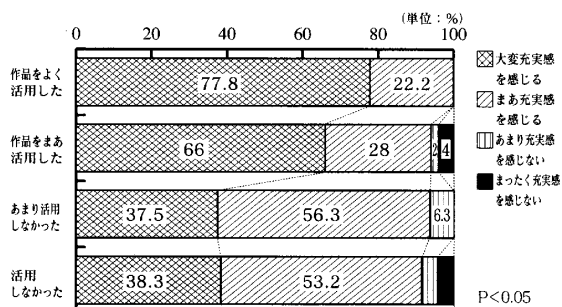


図26. 被服構成学実習で制作した作品の活用度と完成時の充実度とのクロス集計結果

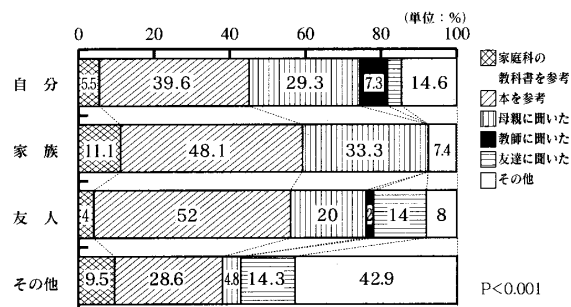


図27. 家庭科の授業以外で自分で制作した作品が誰のためのものかとその場合何を参考にしたかとのクロス集計結果

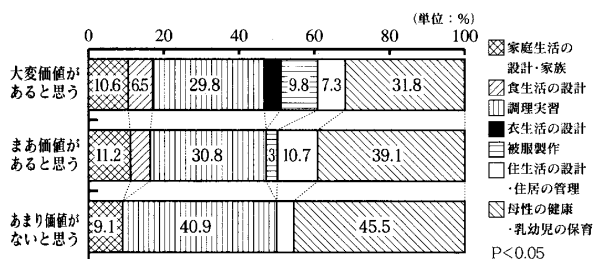


図28. 家庭科の男女共修が価値があるかと家庭科で男子にも学んで欲しい分野とのクロス集計結果

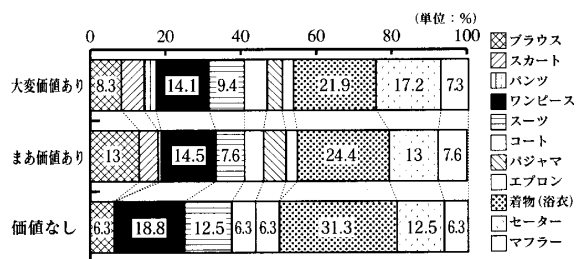


図29. 家庭科の男女共修が価値があるかと被服構成学実習で制作したものとのクロス集計結果

られる。図26は被服構成学実習で制作した作品を活用したかどうかと、完成した時に充実感を感じたかどうかとのクロス集計結果であるが、作品をよく活用した人程大変充実感を感じている。充実感を感じるという事は、制作した作品に満足しているという事なので活用度も高くなると考えられる。図27は家庭科の授業以外で自分で制作した作品が誰のために制作したのかと、その場合何を参考にしたかとのクロス集計結果を示したものであるが、誰のためのものでも本を参考にしたという人が多く、次に母親に聞いたという人が多い。作りたいものを本で探してわからないところは、手近で聞きやすい母親に教えてもらうのではないかと思います。残念ながら家庭科の教科書を参考にしたとか、教師に聞いたというのは極めて少ないが、自分の物を制作する場合には、自分以外の人の物を制作する場合よりも教師に聞く人が多い。

図28は家庭科の男女共修が価値があると思うかどうかと、家庭科で男子にも学んでほしいと思う分野は何かとのクロス集計結果を示したものであるが、男女共修に価値があまりないと思う人程、男子にも母性の健康・乳幼児の保育（45.5%）や、調理実習（40.9%）を学んでほしいと考えている。これは結婚した時に、最も夫に手伝ってほしい事柄であるといえるので、男女共修に価値をあまり認めていなくても、現実的に役立つ事は男子にも学んでほしいと考えている。図29の家庭科の男女共修が価値があると思うかどうかと、被服構成学実習で制作したいものは何かとのクロス集計結果では、着物（浴衣）やワンピースに人気がある傾向は皆同じであるが、家庭科の男女共修に価値がないと考える人ほどその傾向が強い。図30は家庭科の男女共修が価値があると思うかどうかと、被服構成学実習で制作した作品の活用度や時代遅れであると思うかとのクロス集計結果であるが、①の制作した作品の活用度とのクロス集計結果では、男女共修を大変価値があると答えた人と、やや価値があると答えた人の活用度の傾向は似てい

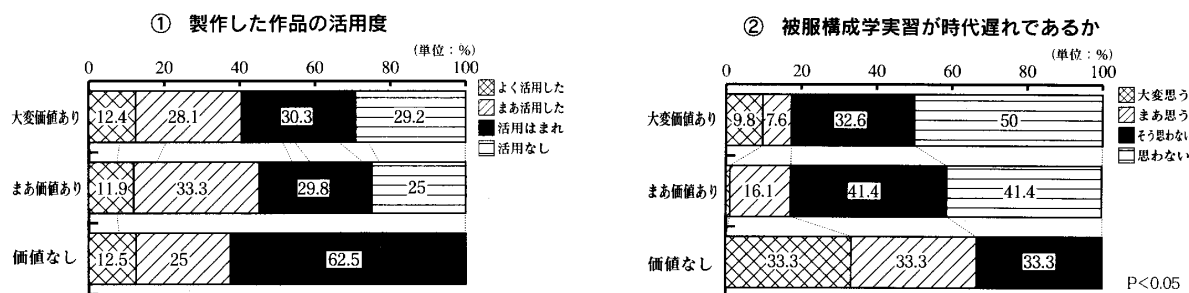


図30. 家庭科の男女共修が価値があるかと被服構成学実習とのクロス集計結果

るが、価値がないと答えた人は被服製作の作品を活用しなかった人が62.5%と大変多い。これは活用しなかったから家庭科の男女共修も必要がないと考えているとも言える。②の被服構成学実習は時代遅れであると思うかどうかとのクロス集計結果では、男女共修が価値があると思う人程、被服構成学実習が時代遅れではないと考えている。これは被服構成学実習の男女共修に価値を見い出していると思われる。

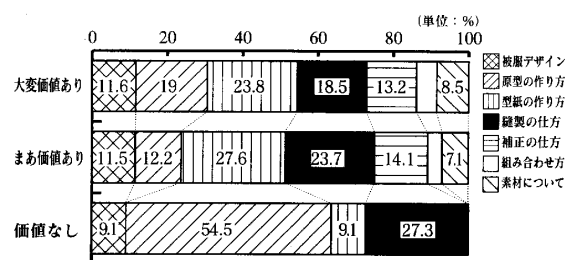


図31. 家庭科の男女共修が価値があるかと被服構成学実習で難しい内容とのクロス集計結果

図31は家庭科の男女共修が価値があると思うかどうかと、被服構成学実習で難しいと思う内容とのクロス集計結果を示したものであるが、男女共修を大変価値があると答えた人とやや価値があると答えた人の傾向は似ている。価値がないと思う人は、型紙の作り方を難しいと考えている人が54.5%と多く、次に補正の仕方が27.3%と多い。つまり価値がないと答えた人の方が、難しいと思う内容の偏りが大きい。

高校生と短大生を比較してみると、高校の家庭科や被服構成学実習に対して全体的には大きな意識の違いはなく、同様の傾向を示すが、家庭科男女共修に関しては、短大生の方がより強く男子も学ぶべきであると考えている。また家庭科の一分野である被服学に対する意識の違いは、被服構成学実習に対する意識の違いと関連がある。

#### 4. 要 約

高校生および短大生が、高等学校の家庭一般、被服構成学実習、高校家庭科の男女共修についてどのような意識を持っているかを調査した結果、次の様なことが明らかになった。

1. 家庭科の授業で興味のある分野では、高校生も短大生も調理実習に大変興味を持っている。興味のない分野としては、高校生は住生活の設計にあまり興味がなく、短大生は家庭生活の設計にあまり興味を持っていない。難しい分野では、短大生の方が高校生よりも、より被服製作や、母性の健康・乳幼児の保育を難しいと考えている。
2. 被服構成学実習で制作した作品を、高校生の方が短大生よりもよく活用している。制作したいものとしては、高校生の方が着物（浴衣）をより多く挙げている。
3. 高校家庭科で男女共修に価値があるかについては、高校生も短大生も大半が価値があると認めているが、特に短大生の方がより強く男子にも家庭科を学んでほしいと望んでいる。

## 家庭科における被服構成学実習の役割について

4. 被服学分野に興味がない学生は、被服学が難しいと考えている。
5. 被服学分野や住生活分野が役立つと考えている学生は、ほとんどの人が被服製作の完成に充実感を感じている。
6. 被服構成学実習が時代遅れであると思う事と、被服学を学ぶ必要性の有無とは、直接には関連性がないと考えられる。
7. 被服構成学実習で何を製作していても、次は別の種類の作品を製作したいと考えている。
8. 被服構成学実習で重点的に学びたい内容として、全体的には縫製の仕方が一番多いが、次に興味のある内容を重点的に学びたいと考えている。
9. 被服構成学実習で製作した作品をよく活用した人程、被服製作を完成した時に充実感を感じる。
10. 家庭科男女共修に価値があると考える人の方が、被服製作の作品の活用度が高い。
11. 家庭科男女共修に価値があると考える人程、被服構成学実習が時代遅れではないと考えている。

終わりに、集計作業にご協力下さいました大分県立芸術文化短期大学の田仲謙司さん及び副手の方々に深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 村田泰彦, 一番ヶ瀬康子, 田結庄順子, 福原美江, 共学家庭科の理論, 光生館 (1986)
- 2) 岡村喜美, 武井洋子, 田部井恵美子, 家庭科教育法, 学文社 (1982)
- 3) 佐藤清子, 家庭科教育－課題と展望－, 建帛社 (1988)
- 4) 青木茂他, 家庭一般, 中教出版 (1984)
- 5) 大矢愛美, 研究紀要, 大分県立芸術短期大学, 29, 23～34 (1991)
- 6) 田中宏子他, 家政学研究, 奈良女子大学家政学会, 71 (1989)
- 7) 東海四県高等学校長連絡協議会, 家庭科男女必修について－「家庭一般」男女共修の試行：三重県立津商業高等学校の場合－ (1990)